

Heureusement que P の統語論的分析

宮腰 駿¹, 田中優生²

1. はじめに

・本発表の対象：Adv que 構文

→特に *heureusement* を Adv とする場合 (以下 *heureusement que* を必要に応じて HQ と略記)

(1) (口論を前にして)

Heureusement que Charles est pas là, dit Zazie. Ça se compliquerait.³

(Raymond Queneau, 2006, *Zazie dans le métro*, *Œuvres complètes III*, Gallimard, 643)

「シャルルがいなくて助かったわ」とザジ。「ひとめめするところね」

(生田耕作訳 2021『地下鉄のザジ新版』中央公論新社, 166)

・副詞毎に異なる事情がある (cf. Anscombre 2016, 2018, Gaatone 2012, etc.)

(2)

a. *Heureusement que* Pierre est parti. (Guimier 1998, タイトル)

幸いなことに、ピエールは出発した。

b. **Malheureusement que* Pierre est parti. (idem)

(3)

a. *Probablement qu'il* viendra. (芦野 2015, 43)

たぶん、彼は来るだろう。

b. **Éventuellement qu'il* viendra. (idem)

・ *Heureusement que* は先行研究において注目を集めてきた (cf. Anscombre 2016, 2018 ; Bacha 1998 ; Borillo 1976 ; Culioli 2018 ; Delahaie 2011, 2014, 2018 ; Furukawa 2005 ; Gaatone 2012, etc.)

→本発表では *Heureusement que* を中心にして議論を行う

・先行研究：*que* 節内 (以下必要に応じて P と略記) の内容 ((2a)でいえば *Pierre est parti*) がどのように意味的に特徴づけられるのかが議論の中心 (2 節で詳述)

→問題の所在：統語論的な特徴が注目を集めることは少なかった

¹ 東京大学大学院, 日本学術振興会特別研究員 DC2, miyakoshishun [at] gmail.com

² 東京大学大学院, 日本学術振興会特別研究員 DC1, qotji2n1 [at] gmail.com

³ 分析において注目する形式を必要に応じてイタリックで強調する。なお本資料における URL の最終閲覧日は 2025 年 6 月 12 日である。

→どのような統語構造のもとで HQ の意味特徴が生じているのか？

- ・本発表の問い ①HQ の意味特徴はどのようなものか？
②意味特徴は統語論的にどのように考えられるのか？

・本発表の目次と分担

1. はじめに	}	宮腰
2. Heureusement que の意味特徴		
3. 意味特徴から統語論的分析へ		
4. Heureusement que の統語構造	}	田中
5. que 節内の左方遊離の統語論		
6. さらなる現象へ		
7. まとめと今後の課題	}	宮腰&田中

2. Heureusement que の意味特徴

・先行研究の見解

- (4) En effet, avec *heureusement que* la séquence correspondant à **p** est préconstruite. (Paillard 2021, 239)
実際、heureusement que を伴う場合、**p** に相当する連鎖は既構築されている。
- (5) ((3)について) 接続詞 *que* は、発話以前に存在するある述定関係が発話時点において再録 (reprise) されることをマークすると考えられる。(芦野 2015, 55)

・HQ は発話時において＜既構築＞されている内容を P として＜再録＞する

→＜再録＞＜既構築＞とはどのようなものか？

・＜再録＞とは何か？→左方文脈に存在する内容が P で再び取り上げられる

・HQ が＜再録＞を行うことを示す現象①

→que 節内の内容が既に左方文脈で言われている場合に HQ が生起／que がない場合は不適⁴

⁴ 対話文脈でなくとも以下のように P における再録が確認できる場合もある。以下の例は Paillard (2021, 239) も引用しているものであり、この例における HQ は que 節を伴わない単独で生じる *heureusement* に置き換えることができることを述べている。

Angoisse, pleurs, je me cache, *j'ai mon sac. Heureusement que j'ai mon sac.* C'est la seule chose amicale dans cette grande gare mon sac.

(ANGOT Christine, 1999, *L'Inceste*, 172, *Frantext*, <https://www.frantext.fr/>)

不安、涙、私は身を隠し、カバンを持っている。カバンがあってよかった。このカバンは巨大な駅の中で唯一親しみを持てるものである。

- (6) – Paul vient de s’offrir un ordinateur.
 – *Heureusement qu’il s’est offert un ordinateur ; je refuse de continuer à lui prêter le mien.*
 (**Heureusement*, il s’est offert un ordinateur.) (Guimier 1998, 166)
 – ポールは自分のためにパソコンを奮発したんだよ。
 – 彼がパソコンを奮発して、良かったよ。これで彼に私のパソコンを貸し続けることをお断り
 できるからね。

・ HQ が<再録>を行うことを示す現象②：等位接続構造における HQ (cf. 宮腰印刷中)

- (7)
 a. (?) Il fait beau et *heureusement qu’il fait beau* ! (作例)⁵
 b. *Il fait beau et *heureusement*, il fait beau ! (作例)
 c. Il fait beau et *heureusement* ! (作例)

→*heureusement* の後に左方文脈で述べられた内容をくりかえそうとした場合、*que* を伴わない構造(7b)よりも HQ(7a)が自然となる／同じ文脈で *que* 節がない場合(7c)も容認される

*ただしポーズとの関係は要調査 cf. *Il fait beau, et heureusement* !

・ <既構築> とは何か？

→P を<あらかじめ断定 (assertion préalable)>されたものとして示す (Delahaie 2018, 259)⁶

→HQ によって P は発話者・対話者間において共有された既知内容として示される

- (8) – Thomas a acheté un nouvel ordinateur.
 – *heureusement qu’il l’a acheté, parce que je ne supportais plus qu’il emprunte le mien.*
 (Delahaie 2011, 112)
 – トマは新しいパソコンを買ったみたいだよ。
 – 彼がパソコンを買って、良かったよ。彼が私のパソコンを借りるの、もう耐えられなかった
 からね。

・ HQ における P が既知内容であることを示す諸現象

⁵ 三名のインフォーマントのうち一名はやや不自然であると評価しているが、「強調 (emphasis)」としてとらえることはできると述べている。繰り返しを避けたいという文体的な理由がこの容認度評価に関係している可能性がある。

⁶ Culioli (2018, 128-129) は HQ について論じる際に「脱断定 (désassertion)」という用語を用いている。この用語は HQ による意味構築において、P がある状況 (Sit) に位置づけられる (P est le cas) という断定の段階を経たうえで、この P が再録されるという流れの中で考えることができる (idem, cf. <est le cas>については Paillard 2009)。この流れの中で、P が断定されたものから再録されるものになるという変化を「脱断定」の概念は表していると考えられる。

・現象①：対話文脈において HQ から que 節を省略できる場合がある (cf. Culioli 2018, Delahaie 2018, etc.)

- (9) A. – Est-ce qu’il sait conduire ce genre d’engins ?
B. – *Heureusement qu’il sait conduire ce genre d’engins !* (Paillard 2021, 239)
A: 彼はこの種の機械を動かすことができますかね？
B: 幸い、できますよ。
- (10) A. – Est-ce qu’il sait conduire ce genre d’engins ?
B. – *Heureusement !* (idem)

→HQ において P は既知内容であるため、繰り返さずに省略してもやり取りは成立する⁷

・現象②：＜自明 (allant de soi)＞ (Delahaie 2011, 116) の内容として P が解釈される場合

- (11) – Thomas a eu son bac.
– bah, *heureusement ! / heureusement qu’il a eu son bac !* et puis quoi encore ! / il a travaillé comme un fou. (Delahaie 2011, 116)
– トマはバカロレアに合格したよ。
– なあに、良かったね／バカロレアに合格したのは良かったけど、それがどうしたというの！
／彼は狂ったように勉強してたじゃないか。

→＜P は知っているというだけに済まず、当たり前すぎる／自明であること＞

→HQ による返答は「無益な質問を前にしたいらだち (impatience devant une question oiseuse)」 (Culioli 2018, 126) を示している

・現象③：「語り (contexte narratifs)」の中で HQ は不適 (Guimier 1998, 170)

- (12) Ma tente, après avoir beaucoup chancelé, finit par s’abattre sur moi. Nul dommage. Nous replions nos bagages sous la pluie et le vent. *Heureusement* tout s’apaise. Nous revenons par un meilleur chemin sur les hauts plateaux. (**Heureusement que* tout s’apaise) (M. Barrès, *Mes cahiers*, cité dans Guimier 1998, 170)
私のテントは、大きくぐらついた後、私の上に崩れることになった。損害なし。私たちは雨風の下、荷物をたたんだ。幸い、すべてが静まった。私たちは高原にもっと良い道で戻ってきた。

→時系列に沿って事態を記述していく文脈の中では HQ は不自然となる

→HQ は新情報である＜次に起きたこと＞を古い情報である既知内容として示してしまう

⁷ *Heureusement* が単独で用いられる場合と HQ には統語的類似性もあり、どちらも *fort* の修飾を容認しない。
Pierre est-il rentré ?

* ? *Fort heureusement !* (cf. **fort heureusement qu’il est rentré*) (Guimier 1998, 165)

・HQの意味(cf. 宮腰印刷中)

→HQのPは「テーマ(thème)」であり、副詞は「説述(propos)」になる(Furukawa 2005, 126)

→意味構造：＜既知内容P(テーマ)がheureusementである(説述)＞

・heureusementの意味論：heureusementは状況を考慮せずとも＜良い／好ましい＞と評価できるものとしてPを示さず、＜個別具体的な状況におけるネガティブな展開を断ち切る＞という価値をPに与える

- (13) (巨大ゴリラと追っ手に追いかけられた Tintin は入口の狭い洞窟に逃げ込んだ。洞窟に隠れていたところ、巨大ゴリラに発見されたがゴリラは体が大きいため洞窟に入ってくることはできない)

Aïe ! Nous sommes découverts ! ... *Heureusement que l'entrée est étroite...*

(Hergé, 2019, *L'Île noire, Tintin Intégrale*, vol. 3, Casterman, 47)

ああ！見つかってしまった！... 入り口が狭くて良かった。

・ネガティブな展開＜洞窟にいるところを発見されこのままでは捕まってしまう＞

→P＜洞窟の入り口が狭い＞は既に洞窟の中にいるため既知内容

→このPによって＜捕まってしまう＞という展開は生じておらず、現に発話者 Tintin は発話時においてひとまず無事(発話時以前にネガティブな展開は断ち切られている)

・まとめ：HQは既知内容Pを予想されるネガティブな展開を断ち切ったテーマとして示す

3. 意味特徴から統語論的分析へ⁸

・先行研究における que のとらえ方：HQにおける que を特殊なものと考えている

- (14) Notre hypothèse est que le *que* y fonctionne en tant que marqueur de thématization. (Furukawa 2005, 125)
我々の仮説は、そこ(=HQ)において que はテーマ化のマーカーとして機能しているというものだ。

- (15) Cette formation [*adv.*] *que* [*p*] correspond à un *que* particulier [...] Il s'agit d'un emploi de type médiatif, que nous noterons le *que*₂. Il s'oppose au *que*₁ complétif-relatif, le plus connu, recensé dans toutes les grammaires. (Anscombe 2016, 212)⁹

この[*adv.*] *que* [*p*]という形成は特殊な *que* に対応している[...] これは我々が *que*₂ と名付けるメディアティブ(媒介的)タイプの用法である。あらゆる文法書において調査されており、最も知られた補文化標識・関係代名詞としての *que*₁ とは対立する。

⁸ 3節の観察は東京フランス語学研究会第59回研究会における宮腰の発表(宮腰 2024b)において提示したものと一部重複しているが、観察に対して本発表で行う分析は研究会発表時のものとは異なっている。

⁹ この *médiatif* という用語はフランス語圏の証拠性研究の文脈において用いられてきたものである(cf. 渡邊 2004)。

・疑問：HQにおける que は特殊？<que にはいろいろな種類がある (que₁, que₂, que₃, ...) > という議論は避けられないか？

←une forme, un sens の考え (Bolinger 1977) に基づくと、構文ごとに特異な que を仮定するのは場当たりのであり、理論的に問題

・疑問を解決するために que と周囲の要素の関係を解明する統語論的分析が必須

→HQにおける que は統語構造においてどのようなものであるのか？どのような理屈によって que 節の要素が既知のテーマとして解釈されるのか？

・HQの統語論的分析の出発点：Furukawa (2005, 125-126) の観察

→Je crois que とは異なり、HQではPにおいて「テーマ化 (thématisation)」が難しい

(16)

a. *Heureusement que* Pierre est là. (idem)

幸いなことに、ピエールはいる。

b. ? *Heureusement que* Pierre, il est là. (idem)

幸いなことに、ピエールについていえば、彼はいると思う。(テーマ読み)

(17)

a. *Je crois que* Pierre est là. (idem)

私は、ピエールはいると思う。

b. *Je crois que* Pierre, il est là. (idem)

私は、ピエールについていえば、彼はいると思う。(テーマ読み)

*Furukawa (2005, 125) : (16b)について「フォーカス化 (focalisation)」の解釈は考慮せず

→データ：Pにおいて左方遊離によるフォーカス化(コントラスト)は可能¹⁰

(18)¹¹

a. ARCHIBALD *soupire*.

La vie est dure ! Moi, je ne pourrais pas.

LE CHEF

Je sais. *Heureusement que* moi je peux.

(Anouilh Jean, 1977, *Chers zoiseaux*, ACTE I, 37, *Frantext*¹²)

ARCHIVALD ため息をつきながら

¹⁰ 本発表では対照トピック (contrastive topic ; Jackendoff 1972, Kuno 1973) という概念は用いず、(18)のように左方遊離要素がコントラストを表す場合にはフォーカスとして分析する (cf. Titov 2013)。

¹¹ (18b-c)については宮腰 (2024a) において用例の提示のみ行っている。この用例調査では Simon Tuchsais 氏の協力を受けた。記して感謝申し上げます。

¹² <https://www.frantext.fr/>

「人生は難しいな！私はできないだろう」

LE CHEF

「知ってますよ。幸いなことに、私はできますがね。」

- b. Les polardes, les excitées, on le sait, des emmerdeuses. *Heureusement que* toi tu es équilibrée, [...]

(Annie Ernaux, 1981, *La femme gelée*, Gallimard, 174)

ガリ勉女、ハリキリ女、いうまでもないけど、ああいうタイプの女は実に閉口するね。幸いきみは変に突っ走ってないから助かるよ。

(堀茂樹訳 1995『凍りついた女』早川書房, 231)

- c. CAL. –Moi aussi avant, le whisky, je crachais dessus ; et je buvais du lait, moi, rien que du lait, je peux vous le dire ; des litres, des barriques ; avant de voyager. Mais, depuis que je voyage, tiens : leur saloperie de lait en poudre, leur lait américain, leur lait de soja, il n’y a pas un poil de vache qui entre dans ce lait-là. Alors, bien obligé de se mettre à cette saloperie. (Il boit.)

LÉONE. –Oui.

CAL. –*Heureusement que* cette saloperie-là on la trouve partout ; pour ça, je n’en ai jamais manqué, dans aucun coin du monde. Pourtant j’ai voyagé ; et vous pouvez me croire. Vous avez voyagé ? (Bernard-Marie Koltès, 1989, *Combat de nègre et de chiens suivi des Carnets*, Les Éditions de Minuit, 38-39)

カル おれも以前は、ウイスキーを吐いていたものさ。それで、牛乳を飲んでいて、おれ、牛乳だけを、な、あんたにはいってもいい、なんリットルも、大樽で、あちこち渡り歩く前。が、旅に出てからというもの、ふん、やつらのくそ厭ったらしい粉ミルク、やつらのアメリカ・ミルク、やつらの豆乳、その手の牛乳には雌牛の尻尾だって入ってやしない。それで、こっちの粗悪物をはじめなくちゃいけなかったというわけさ (飲む)。

レオーヌ そう。

カル 幸い、こっちの粗悪物はどこでも見つけられる、こればかりは世界のいたるところ不足するということはない。とにかく、おれは旅したんだ、信じてくれていい、あんた、旅行したことは？

(佐伯隆幸, 西樹里訳 2015『黒人と犬どもの闘争／プロローグ コルテス戯曲集 3』れんが書房新社, 43-44)

(18a)：発話者と対話者の対比

(18b)：他の女性と対話者の対比

(18c)：cette saloperie-là (=ウイスキー) と乳製品の対比

・まとめ

①HQ における P は既知のテーマとして解釈される

②que 節内部において左方遊離によるテーマ化は難しいが、フォーカス化は可能

[ここまで宮腰担当分。以下、田中担当分]

4. Heureusement que の統語構造

・ 4-5 節の目的：3 節までに観察した HQ の意味特徴を統語論的に分析する

・ que のステータスについて (cf. 3 節)

→ 先行研究：HQ における que は特殊なマーカ (Anscombe 2016 ; Furukawa 2005)

→ une forme, un sens の原則 (Bolinger 1977) を踏まえると、HQ における que は(19)における que と同様、通常の補文化辞 (complémentiseur) として振る舞うと考えるのが妥当

(19) Je crois *qu'*il est là.

・ que 節の内部構造

→ 左方周辺部 (left periphery) をめぐる分離 CP 仮説 (Rizzi 1997)

→ ロマンズ諸語を中心とする言語データに基づき CP (complementizer phrase) が持つ多様な談話機能を分離、階層化 (カートグラフィー)

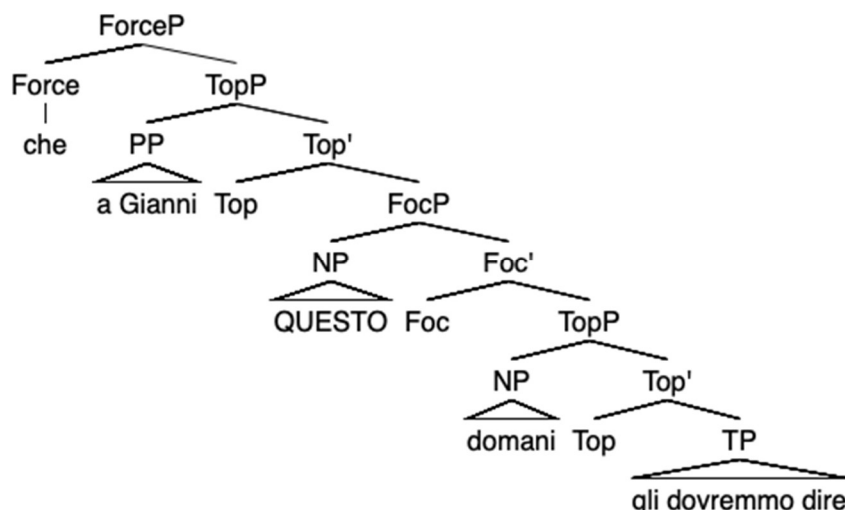
・ 左方周辺部の普遍的階層性

(20) Force > Top(ic) > Foc(us) > Top(ic) > Fin(ite)

(21) Credo che [a Gianni]_{Topic1}, [QUESTO]_{Focus}, [domani]_{Topic2}, gli dovremmo dire. [Italian]¹³

believe that to Gianni this tomorrow it should say

“I believe that to Gianni, THIS, tomorrow we should say.” (Rizzi 1997, 295)

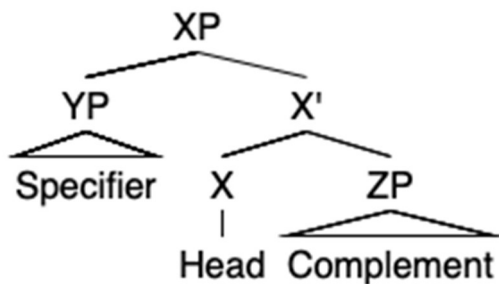


* TP = tense phrase. いわゆる「節 (clause)」

・ TopP, FocP の指定部 (specifier) の位置に対応する談話素性を持つ要素が生起

¹³ 以降、フォーカス化を受けた要素を便宜上大文字で表記する。

* X バースキーマ (Chomsky 1970, Jackendoff 1977)

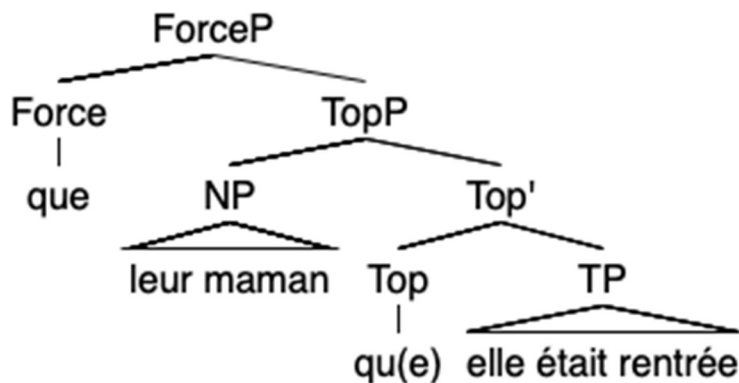


・ 現代標準仏語では C 領域の分離は見えづらいが…

・ 幼児仏語 (Child French) ・ 古仏語 (Old French) における *que* の重複 (reduplication)^{14, 15}

(22)

- a. Ils savaient pas *que* leur maman_i *qu'*elle_i était rentrée. (Child French, 6 歳)
(Roehrs & Labelle 2003 ; cité dans Salvesen 2014, 56)
- b. Je te parjure par le vrai Dieu *que* ta fille Tarsienne_i *que* tu ne la_i donnes a mariage a autre *que* a moy. (Old French)
« Je te jure par le vrai Dieu *que* tu ne donnes pas ta fille Tarsienne à d'autre personne *que* moi. » (Apollonius [XIV^e], Ledgeway 2012, 171 ; cité dans Salvesen 2014, 60)



¹⁴ 類似の補文化辞重複 (complementizer reduplication) はスペイン語で見られる (Villa-Garcia 2019) 他、Radford (2018) は口語の英語でも見られることを観察している。

I just wanted to say *that* despite all these short term problems *that* they needed to keep in mind the needs of the poor. (Bill Gates, BBC Radio 4 ; Radford 2018, 122)

¹⁵ Salvesen (2014) は *que* が右側の位置で基底生成 (base generate) され、左側の位置への主要部移動 (head movement) を起こすと分析している。本発表では二つの *que* の統語派生上のステータスについては立ち入らない。

・ Cruschina & Remberger (2018) : HQ における que は Force (ロマンス語における類似の構文のデータに基づく)¹⁶

・ HQ 構文の que 節の中身について

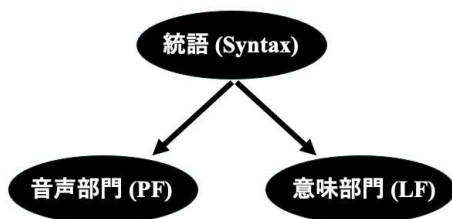
→表面的には普通の文

→しかし、HQ 構文の que 節内部の文は既知のテーマとして解釈される (2 節)

・ 意味部門 (LF) におけるテーマ化

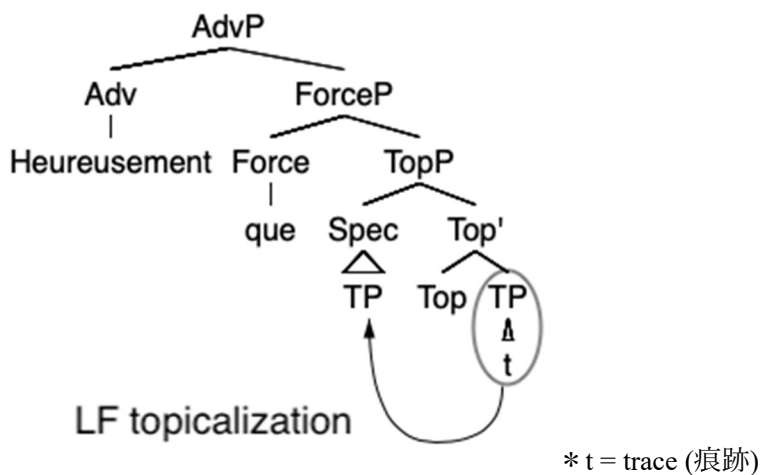
→カートグラフィーでは、TopP の指定部への移動として分析される

cf. Y モデル (Chomsky 1965 ; simplified)¹⁷



LF における移動：音声上の影響を持たない

まとめると...¹⁸



¹⁶ que の正確な位置については議論の余地があるが、que 節内でフォーカス化が可能であること (cf. (18)) を踏まえると、少なくとも Foc より高い位置にあると想定できる。

¹⁷ 言語研究のモジュール的な発想方法については Nölke & Adam (dir) (1999) の議論を参照。

¹⁸ ここでは HQ 構文において heureusement が全体の主要部であると想定している (cf. Abeillé et al. 2021, 894 ; Bonami & Godard 2007, 265)。heureusement の統語的ステータスは本発表では問題にならないが、heureusement が主要部だと仮定することで、*Fort heureusement que...のような修飾を許さない (cf. Gaatone 2012, 1740) 事実が説明できる (cf. 注 7)。

・本節の分析の要点

- ①HQ における que は通常の補文化辞 (complémentiseur) であり、C (Force) を占める
- ②que 節内部の文は意味部門においてテーマ化の移動を経て、既知内容として解釈される

5. que 節内の左方遊離の統語論

・データ：HQ 構文の que 節内において、テーマ化は難しいが、フォーカス化は OK (3 節)

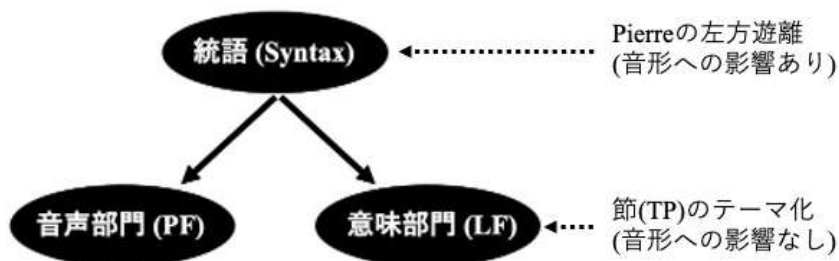
(23)

- a. ? *Heureusement que Pierre*_[Topic], il est là. (Furukawa 2005, 125)
- b. [ピエールとマリーがパーティーに招待されていたが、マリーは来なかった。]
*Heureusement que PIERRE*_[Focus], il est là. (宮腰 2024b)

- ・テーマ化により左方遊離された要素は TopP の指定部を占める
- ・左方遊離は音形への影響を持つ→統語部門で起こる

(24)

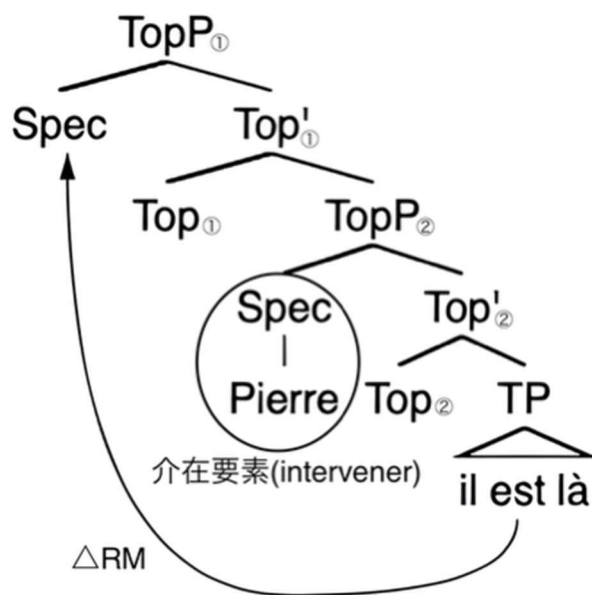
- a. [TP Pierre_i est là]
- b. [TopP [Spec Pierre_i] [TP il_i est là]]



・節 (TP) のテーマ化：左方遊離とは独立に、HQ 構文では常に起こると仮定 (4 節)

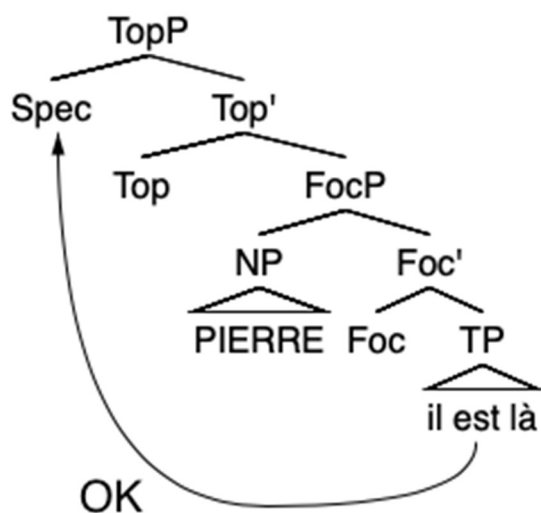
・LF における TopP 指定部への移動

→(23a)の場合、統語部門で既にテーマ化された Pierre を「超えて」移動することになる



[意味部門において]

- ・素性に基づく相対的最小性 (feature-based Relativized Minimality (RM) ; Rizzi 2004, Maeda 2010, 2014)
→移動する要素と同一の談話素性 (e.g. トピック)¹⁹を持つ要素を「超えて」移動すると容認度が低下する
- ・ (23a)では TP のテーマ化の際に同じトピック素性を持つ Pierre が介在要素 (intervener) になるため容認度が下がる
- ・ (23b)は PIERRE が TP とは別の談話素性 (フォーカス) を持つため、介在要素にならない



[意味部門において]

¹⁹ 本発表では、素性の名前として「トピック」という用語を用いるが、HQにおけるPが持つ特徴を示すためにここまで用いてきた「テーマ」という用語と「トピック」が指し示す実質的な内容は基本的に同一である。

Cf. 英語におけるトピック、フォーカスと RM²⁰

(25)

- a. ? [Of John]_{Topic}, I think that [pictures]_{Topic}, Mary likes.
b. [VOWEL HARMONY]_{Focus}, I think that [articles of]_{Topic}, you should read. (Maeda 2010, 273)

・ (23)と同じパターン

→トピック素性を持つ要素を超えたテーマ化移動は RM によって容認度が下がる

→HQ 構文の que 節内における左方遊離の可否に関する非対称性を一般的な (i.e. 言語・構文に特異的でない) 原理から導出！

6. さらなる現象へ

- ・ 4 節の分析：HQ における que は通常の補文化辞であり、C (Force)²¹ を占める一帰結は？
- ・ Adv que 構文の que 節内部では主語接辞倒置 (inversion du sujet clitique) が生じない

(26)

- a. *Peut-être* avait-il entendu cette phrase dans la bouche de sa tante. (MODIANO, *Remise*, 22)
事によると彼は叔母の口からこの言葉を聞いていたかも知れない。(朝倉 2002, 388)
b. **Peut-être que* viendra-t-elle demain. (Gaetane 2012, 1734, 一部表記変更)

Cf. Google 検索 « heureusement qu’a-t-il », « heureusement qu’a-t-elle » : いずれもゼロ例

・ 文体倒置 (inversion stylistique) は OK (28)

→文体倒置：疑問節や関係節、補足節などで起こる、非代名詞の主語の後置

・ 文体倒置は主語が長い時に起こりやすい

- (27) Je voulais d’abord que sèche la sueur qui m’inondait le visage et collait ma chemise à ma peau.
(MODIANO, *Vestiaire*, 94)
まず、顔をぐっしより濡らし、シャツを肌にへばりつかせている汗が乾いてもらいたかった。
(朝倉 2002, 517)

²⁰ 類似の介在効果はいわゆる wh の島の制約 (Ross 1967) にも見られる。(ii)は同じ疑問の素性を持つ how を「超えて」which problem が移動しているために容認度が低くなると分析される。

(i) [Which problem]_i do you think he wants to solve t_i?

(ii) ? [Which problem]_i do you wonder how to solve t_i? (Rizzi 1990, 73)

²¹ 本節では C の内部の微細構造は問題にならないので、単に C と表記する。

- ・ HQ の que 節内部での文体倒置

(28)

- a. *Heureusement qu'est arrivé Claude Chabrol, sinon le rôle du trouble-fête, de l'enfant terrible, échappait à la nouvelle vague.*
(*Le Monde*, « Le Chabrol aux navets », 20 mai 1985.
https://www.lemonde.fr/archives/article/1985/05/20/le-chabrol-aux-navets_2746040_1819218.html)
幸い、Claude Chabrol がやってきた。そうでなければ、邪魔者、異端者の役がヌーヴェル・ヴァーグに見逃されていただろう。
- b. *Heureusement qu'est arrivé le moment où nous avons pris conscience que si la classe ouvrière ne se précipitait pas comme un seul homme dans le grand parti révolutionnaire que nous voulions construire, c'est peut-être que nous étions en train de nous planter.*
(*L'Humanité*, « Que reste-t-il de nos amours ? », 20 juillet 2005.
<https://www.humanite.fr/culture-et-savoir/jean-henri-roger/que-reste-t-il-de-nos-amours>)
幸いにして、労働者階級が一丸となって我々が作らんとした大革命党に駆けつけなかったのは、恐らく我々がしくじっていたからであるということに気がついた時が来た。

・ 問い：Adv que 構文における que 節内部の主語接辞倒置(26b)と文体倒置(28)の非対称性をどのように説明するか？

- ・ 主語接辞倒置と文体倒置の違い→(29)を踏まえると、似たような操作に思えるが…

(29)

- a. Quand partira-t-il ?
- b. Quand partira ce garçon ? (Kayne 1972, 70)

①全体疑問文 (oui/non 疑問文) の可否

(30)

- a. Partira-t-il ?
- b. *Partira ce garçon ? (idem)

②語順の違い

- ・ [目的語がある場合] 主語接辞倒置の場合、主語代名詞は目的語に先行 (動詞と目的語の間に挟まれる)

(31)

- a. À quelle heure changera-t-elle d'avis ? (ibidem, 71)
- b. *À quelle heure changera d'avis elle ?

- ・ 文体倒置の場合、主語は目的語に後行 (目的語を「超えて」後置)

(32)

- a. *À quelle heure changera cette fille d'avis ?
- b. À quelle heure changera d'avis le prisonnier auquel la police est en train de faire subir des tortures
inimaginables ? (ibidem, 71-72)
何時になったら、警察が想像しがたい拷問を行なっている囚人は考えを改めるのか？

- ・ 主語接辞倒置と文体倒置の統語論的分析

[主語接辞倒置：動詞の主要部移動
[文体倒置：主語の後置 (cf. Kayne 1980, 1983 ; 小川 1992 ; Rizzi & Roberts 1989)

(33)

- a. 主語接辞倒置
[CP ... [C Verbi] [TP Subj.-Cl. [T ti] ...]]
- b. 文体倒置
[CP ... [C] [TP ti [T Verb] ... Subj.i]]

- ・ 主語接辞倒置の場合は、動詞が単体で主語を超えて左に移動→Verb > Subj.-Cl. (> Obj.) の語順に
- ・ 文体倒置の場合は、主語が VP 全体を跨いで右に移動→Verb (> Obj.) > Subj. の語順に

- ・ que 節内部での生起に関する予測²²

主語接辞倒置では動詞が C まで移動→que が既に C を埋めていると生じられない

文体倒置は C 領域への移動なし→que 節内部でも問題なく生じる

(34)

- a. *Peut-être que viendra-t-elle demain. (= (26b))
- b. Heureusement qu'est arrivé Claude Chabrol, [...] (= (28a))

- ・ HQ 構文の que を通常の接続詞と同じく C を占めると分析したからこそその帰結
→HQ の que 節内部の倒置現象に関する原理的な説明

²² 顕在的 C と動詞移動が相補分布を示すのは HQ に限らない一般的な現象である。仮定倒置 (inversion conditionnelle) がその好例である。

(i) S'il fait beau demain, nous sortirons. (『プログレッシブ仏和辞典』第 2 版, si の項目)
(ii) Fait-il beau, nous sortons. (朝倉 2002, 517)

7. まとめと今後の課題

- ・ まとめ

①heureusement que の意味特徴

- ・ que 節内の内容 (P) がテーマとして振る舞う
- ・ que 節内部の左方遊離：テーマ化解釈は難しいが、フォーカス化は OK

②統語論的分析

- ・ HQ の que は通常の補文化辞で、C (Force) を占める
- ・ que 節内の文が意味部門 (LF) においてテーマ化のための移動を起こす

③帰結

- ・ que 節内部のテーマ化・フォーカス化の非対称性が RM の原理によって説明できる
- ・ que 節内部における倒置の可否に関する予測も

- ・ 残された問題

(35) (= (2))

- a. *Heureusement que* Pierre est parti. (Guimier 1998, タイトル)
- b. **Malheureusement que* Pierre est parti. (idem)

- ・ 意味的な説明 (Furukawa 2005, 130-131 ; Gaatone 2012, 1740 ; Guimier 1998, 174-175)
- 形態統語的な説明の可能性はないのか？

- ・ HQ 構文全体の主要部は副詞 (注 18)→形態的に複雑な要素は生じられない？
- 否定接頭辞がつく副詞はとりわけ容認度が低い

(36) **Incontestablement que* Jean a raison. (Borillo 1976, 78)

- ・ 他の言語では？

Adv que に相当する構文は他のロマンス諸語でも見られる (e.g. Cruschina & Remberger 2017)²³
→概して発話者の主観的評価や証拠性、認識的モダリティを表す

- ・ ルーマニア語やシチリア語では接続詞およびその前に生じる要素が凝結 (e.g. [Rom] *cică < zice că* “says that”) し、証拠性・モダリティのマーカースとして文法化 (cf. Cruschina & Remberger 2017, Suzuki 2024)

²³ Radford (2013)は、口語の英語でも Adv that 構文が見られることを報告している。
Obviously that the Achilles was giving him a bit of a problem.
(Ian Chappel, BBC Radio 5, cited in Radford 2013, 34)

・フランス語の Adv que 構文は、ルーマニア語ほどは文法化していない (副詞の元の意味を失っておらず、意味が構成的) → 統語論的分析の対象

・本発表ではフランス語の HQ に絞って分析

→ 他の言語の類似の構文に本発表の分析がどのように適用されるか (あるいは、されないか) は今後の研究課題

* 本発表の内容は JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム (JPMJSP2108) および JSPS 特別研究員奨励費 (25KJ0984, 25KJ0881) の支援を受けた研究成果の一部である。本発表の準備段階で金子真氏から有益なコメントを受けた。記して感謝申し上げる。

参考文献

- Abeillé, A. et al. (dir) (2021), *La Grande Grammaire du Français*, Arles, Actes Sud.
- Anscombre, J.-C. (2016), “Les constructions en *adverbe que p* en français. Essai de caractérisation sémantique d’une matrice lexicale productive”, *Cahiers de lexicologie* 108, 199-223.
- Anscombre, J.-C. (2018), “Le *que* médiatif du français contemporain. Perspectives diachronique et comparée”, *Revue Romane* 53-2, 181-216.
- 朝倉季雄 (2002) 『新フランス文法事典』白水社
- 芦野文武 (2015) 「『蓋然性』のモダリティを表すマーカー *probablement* と *éventuellement* の対照研究」川口順二編『フランス語学の最前線 3 【特集】モダリティ』ひつじ書房, 39-60.
- Bacha, J. (1998), “ ‘*Bien sûr que je viendrai*’, Remarques sur les adverbes construits avec une complétive”, *L’information grammaticale* 2 Numéro spécial Tunisie, 27-31.
- Bolinger, D. (1977), *The Form of Language*, London, Longman.
- Bonami, O. & D. Godard (2007), “Quelle syntaxe, incidemment, pour les adverbes incidents ?”, *Bulletin de la société de linguistique de Paris*, 102-1, 255-284.
- Borillo, A. (1976), “Les adverbes et la modalisation de l’assertion”, *Langue française* 30, 74-89.
- Chomsky, N. (1965), *Aspects of the Theory of Syntax*, Cambridge, Mass., MIT Press.
- Chomsky, N. (1970), “Remarks on nominalization”, R. Jacobs & P. Rosenbaum (eds) *Reading in English Transformational Grammar*, Waltham, Ginn, 184-221.
- Cruschina, S. & E.-M. Remberger (2018), “Speaker-oriented syntax and root clause complementizers”, *Linguistic Variation* 18-2, 336-358.
- Culioli, A. (2018), “*Heureusement !*”, *Pour une linguistique de l’énonciation. Tome IV Tours et détours*, Limoges, Lambert-Lucas, 125-133.
- Delahaie, J. (2011), “L’illusion synchronique et les leçons de l’histoire. Interprétation sémantique d’un curieux couple faussement symétrique, *malheureusement / heureusement (que)*”, *Revue de sémantique et pragmatique* 29/30, 107-133.
- Delahaie, J. (2014), “Les constructions en *adv. que p* : étude diachronique d’une tournure adverbiale particulière à

- partir du cas de *heureusement que p*”, J.-C. Anscombre et al. (dir) *Médiativité, polyphonie et modalité en français. Études synchroniques et diachroniques*, Paris, Presses Sorbonne Nouvelle, 223-241.
- Delahaie, J. (2018), “Entité lexicale : *heureusement*”, J.-C. Anscombre et al. (eds) *Opérateurs discursifs du français, 2. Eléments de description sémantique et pragmatique*, Berne, Peter Lang, 249-261.
- Furukawa, N. (2005), “*Heureusement qu’il est là* : construction à élément thématique propositionnel”, *Pour une sémantique des constructions grammaticales. Thème et thématique*, Bruxelles, Éditions Duculot, 123-133.
- Gaetone, D. (2012), “Anatomie d’une pseudo-phrase complexe : le cas de *heureusement que P*”, *SHS Web of Conferences* 1, 3^e Congrès Mondial de Linguistique Française, 1731-1742.
- Guimier, C. (1998), “Pourquoi peut-on dire *Heureusement que Pierre est parti*, mais pas **Malheureusement que Pierre est parti* ?”, *Revue de sémantique et pragmatique* 3, 161-176.
- Jackendoff, R. (1972), *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, Cambridge, Mass., MIT Press.
- Jackendoff, R. (1977), *X-bar-Syntax: A Study of Phrase Structure*, Cambridge, Mass., MIT Press.
- Kayne, R. (1972), “Subject inversion in French interrogatives”, J. Casagrande & B. Saciuk (eds) *Generative Studies in Romance Languages*, Mass., Newbury House, 70-126.
- Kayne, R. S. (1980), “Extensions of binding and case-marking”, *Linguistic Inquiry* 11-1, 75-96.
- Kayne, R. S. (1983), “Chains, categories external to S, and French complex inversion”, *Natural Language & Linguistic Theory* 1-1, 107-139.
- Kuno, S. (1973), *The Structure of the Japanese Language*, Cambridge, Mass., MIT Press.
- Ledgeway, A. (2012), *From Latin to Romance: Morphosyntactic Typology and Change*, Oxford, Oxford University Press.
- Maeda, M. (2010), “The criterial freezing effect and split A’-movement”, *English Linguistics* 27-2, 270-296.
- Maeda, M. (2014), *Derivational Feature-based Relativized Minimality*, Fukuoka, Kyushu University Press.
- 宮腰駿 (2024a) 「*Heureusement que P* の用法に関する一考察」『筑波大学フランス語・フランス文学論集』 39, 21-35.
- 宮腰駿 (2024b) 「*Heureusement que...* に関する一考察」東京フランス語学研究会第 59 回大会発表資料, 2024 年 4 月 20 日.
- 宮腰駿 (印刷中) 「評価副詞 *heureusement* の用法と意味について」『フランス語学研究』 59.
- Nølke, H. & J.-M. Adam (dir) (1999), *Approches modulaires : de la langue au discours*, Lausanne, Delachaux et Niestlé.
- 小川裕花 (1992) 「フランス語の主語接辞倒置構文と文体倒置構文」『フランス語学研究』 26, 38-48.
- Paillard, D. (2009), “*Prise en charge, commitment* ou scène énonciative”, *Langue française* 162, 109-128.
- Paillard, D. (2021), *Grammaire discursive du français. Étude des marqueurs discursifs en -ment*, Bruxelles, Peter Lang.
- Radford, A. (2013), “Evidence from broadcast media: The complementiser system in spoken English”, V. Camacho-Taboada et al. (eds.) *Information Structure and Agreement*, Amsterdam, John Benjamins, 11-54.
- Radford, A. (2018), *Colloquial English: Structure and variation*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Rizzi, L. (1990), *Relativized Minimality*, Cambridge, Mass., MIT Press.
- Rizzi, L. (1997), “The fine structure of the left periphery”, L. Haegeman (ed) *Elements of Grammar: Handbook of*

- Generative Syntax*, Dordrecht, Springer, 281-337
- Rizzi, L. (2004), “Locality and left periphery”, A. Belletti (ed) *Structures and Beyond*, Vols. 1-3, Oxford, Oxford University Press, 223-251.
- Rizzi, L., & I. G. Roberts (1989), “Complex inversion in French”, *Probus* 1-1, 1-30.
- Roehrs, D. & M. Labelle (2003), “The left periphery in Child French: Evidence for a simply-split CP”, J. Quer et al. (eds) *Romance Languages and Linguistic Theory 2001: Selected papers from ‘Going Romance’, Amsterdam, 6-8 December 2001*, Amsterdam, John Benjamins, 279-294.
- Ross, J. (1967), *Constraints on Variables in Syntax*, Doctoral dissertation, Mass., MIT.
- Salvesen, C. M. (2014), “Le complémenteur ‘que’ et la périphérie gauche : Analyse diachronique”, *Syntaxe et Sémantique* 15, 47-80.
- Suzuki, S. (2024), “Hearsay evidential markers: On the degree of grammaticalization of Italian *dice che* and Romanian *cică*”, *Studii și cercetări lingvistice* 85-1, 3-24.
- Titov, E. (2013), “Do contrastive topics exist?”, *Journal of Linguistics* 49-2, 413-454.
- Villa-García, J. (2019), “Recomplementation in English and Spanish: Delineating the CP space”, *Glossa* 4-1, Article 1.
- 渡邊淳也 (2004) 『フランス語における証拠性の意味論』 早美出版社.